



No. 3

2016

CONTENTS

人間生活文化研究所 設立35周年に寄せて	1
人間生活文化研究所が設立35周年を迎えました	2
本学の研究助成事業を活用した科学研究費補助金申請について	3
人間生活文化研究所「特別研究員」	4
人間生活文化研究所 研究費助成事業	6
大妻女子大学 戦略的個人研究費	8
日本学術振興会 科学研究費助成事業 平成28年度採択課題	9
お知らせ	10
人間生活文化研究所 研究費助成事業関連 カレンダー	10

〈大妻女子大学人間生活文化研究所〉

人間生活文化研究所 設立35周年に寄せて

「人間生活文化研究所」は創設以来35年を閲しますが、この間に当研究所が果たして来られた多大なご功績に対し衷心より敬意を表します。

当研究所には今年度から新たに「特別研究員制度」が設けられることとなりました。これを機に、各界ですでに指導的立場でご活躍中の諸先生方を多数お迎えすることで、当研究所が旧にも増して「知の梁山泊」の様相を呈して参るものと思われましますのは悦ばしいかぎりであります。

なお本研究所では、賛助会員企業様のご協力を得て「大学院生研究助成」を行っておりますが、これを今年度からは院生のみなさんの自由な研究活動にいっそう資するよう「奨学金」のような形式で一括

支給することに改めました。これにより、日本の「生活文化」について広く学ばれる新進の研究者の皆さんにさらに大きく門戸が開かれることになるものと期待いたしております。

人間の「生活」はヒト・モノ・コトの複合によって成り立っていると言えますが、そのヒト・モノ・コトそれぞれに付加価値をつけ、その総合から新たな価値が創発する仕組みが「生活文化」だとするなら、いま社会のあちこちに漂っている閉塞感から脱するには、まずはわれわれ一人ひとりが「生活文化」の創生者であるとの自覚をもって、自らの「生活」を見直し、再構築していくことが大事です。「人間生活文化研究所」は、そのための方略をさまざまな視点から多角的に研究する全学

的な機構です。少子高齢化社会、男女共同参画社会、一億総活躍社会などが高唱されるなか、当研究所に期待されるところますます大と言わねばなりません。年齢、性別、経歴などに関係なく、数多くの研究者たちがここに集ってくださることを期待いたしております。



大妻学院 理事長
大妻女子大学 学長

花村 邦昭

人間生活文化研究所の事業は、多くの企業の皆様からご支援いただいています。

前田建設工業株式会社
鹿島建設株式会社
清水建設株式会社
ダイダン株式会社
株式会社三井住友銀行

株式会社九電工
山崎製パン株式会社
株式会社オンワードホールディングス
三菱地所株式会社
株式会社岡村製作所

富士ゼロックス株式会社
株式会社三越伊勢丹プロパティ・デザイン
キュービー株式会社
東京ケータリング株式会社
株式会社内田洋行

(順不同、2016年7月5日現在)

人間生活文化研究所が設立35周年を迎えました

本研究所が「大妻女子大学人間生活科学研究所」として設立されたのは1981年4月。今年で35周年を迎えました。2008年には組織を大幅に変更し、「大妻女子大学人間生活文化研究所」として新たにスタートを切り、研究活動だけでなく、国内外及び学内外の研究者相互の交流とコラボレーションの促進、学内の研究者に対する競争的外部研究資金の獲得支援、全学的な研究成果の公表事業などに、特に力を注いでいます。

みなさまには、今後とも、人間生活文化研究所へのご理解、ご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

大妻女子大学人間生活文化研究所 沿革

1981年	4月	大学附置研究所として大妻女子大学人間生活科学研究所が設立された。 所長には内藤三郎学長が就任し、被服体型研究部門および発達環境研究部門で構成された。
1982年	4月	人間生理生態研究部門が増設され、狭山台キャンパスに研究所本棟が竣工した。
1983年	4月	研究所が狭山台から千代田キャンパスに移り、所長に吉田寿雄学長代行が就任した。
1986年	10月	中川秀恭学長が所長に就任した。
1987年	6月	近藤四郎教授が所長に就任した。
1988年	2月	大学校舎B棟2階に移転した。
1989年	5月	2部門の名称変更が行われ、形態成長研究部門、発達環境研究部門、生理生態研究部門の3部構成となった。
1991年	11月	情報研究部門（流動部門）が増設された。
1994年	4月	高石昌弘教授が所長に就任した。
1995年	4月	情報研究部門が定常化され、4部門で構成されることとなった。
1996年	4月	設立15年を迎え、9月14日、記念フォーラムならびに記念祝賀会が行われた。
2000年	4月	佐野博敏学長が所長に就任し、3部門の名称変更が行われ、形態成長研究部門、行動疫学研究部門、健康生態研究部門、情報文化研究部門の4部門構成となった。
2002年	12月	大学図書館5階および6階に移転した。
2006年	4月	形態成長研究部門から環境成長部門に名称変更された。
2007年	4月	下村道子教授が所長に就任した。
2008年	4月	大妻学院100周年記念事業の一環として改組が行われ、人間生活文化研究所と名称変更した。
2009年	4月	大澤清二教授（副学長）が所長に就任した。
2012年	10月	設立30年を迎え、10月19日、記念シンポジウムが行われた。

戦略的個人研究費、共同研究プロジェクトから科研費へ

本学の研究助成事業を活用した科学研究費補助金申請について



大妻女子大学
家政学部長

青江 誠一郎

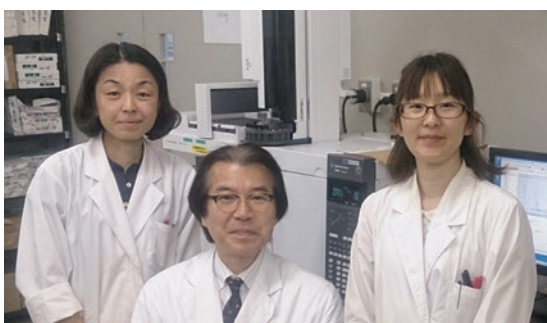
本学には、学内競争的資金として戦略的個人研究費がある。これは教員の研究活動の活性化・高度化、競争的外部資金への応募促進を目的とした助成制度である。平成26年に新設され、学内外有識者により評価がなされ、採択が決定される。筆者は、初年度より応募し、平成26年度は、「メタボリックシンドロームモデルマウスを用いた高血圧症の予防効果の評価法の確立と食事因子の評価」が、平成27年度は「メタボリックシンドロームモデルマウスの腸内代謝物のメタボローム解析法の確立と食事因子の評価」が採択された。両プロジェクトで導入し、確立した研究成果を活用して平成28年度科学研究費補助金に応募し、採択された。申請ポイントとして、研究体制が学内競争的資金により整備されており、すぐに研究を開始できることを主張した。これは、科学研究費補助金の審査をしていて感じることもあるが、これから必要な機器を導入して検討する研究計

画より、すでに機器などが導入され、実行性が高い研究をアピールする方が補助金の使途として適するのではないかと考えている。さらには、戦略的個人研究費の申請フォーマットは、科学研究費補助金申請フォーマットと同一であるため、戦略的個人研究費の申請を科学研究費補助金申請のプロトタイプ申請と位置づけることもできる。筆者は、平成26年度採択された戦略的個人研究課題をベースに改良を加え、平成28年度の科学研究費補助金「穀類の摂取による高血圧症の予防効果と腸内代謝を介したメカニズムの研究」の採択へ結びつけることができた。

一方、人間生活文化研究所が募集する競争的研究費として共同研究プロジェクトがある。こちらは平成20年度から開始され、異分野の研究者で構成されることを特徴とし、これまでに多種多様な100以上の研究課題が遂行されている。筆者は、平成26年度から新たな視点で応募を開始した。すなわち、共同

研究プロジェクトを、博士後期課程の大学院生や人間生活文化研究所研究員が、テーマ横断的に活用できる評価技術を導入する研究と位置づけた。これにより、汎用的な専門機器の導入と評価系が確立でき、またその応用範囲が筆者の研究のみならず、卒論生、大学院生、研究員が活用できる共同研究成果を得ることができ、非常に有益な助成事業の活用法となっている。一貫して慢性炎症の評価システムを構築することに注力してきたため、科学研究費補助金の申請時にこれまでの成果、実行性を主張することができた。

以上のように、戦略的個人研究費を科学研究費補助金申請のプロト申請として、共同研究プロジェクトを実行性の担保として活用し、これまで平成17年度より連続して科学研究費補助金を獲得することができている。この場をお借りして関係者に御礼申し上げるとともに、申請者の参考になれば幸いである。



山岸研究員、山中大学院生(博士後期課程)
メタボロミクス解析GC/MSの前で

人間生活文化研究所「特別研究員」

当研究所に「特別研究員」制度が新設されました。特別研究員となったのは、以下の5名。各分野において優れた研究業績をあげた方々で、今後、当研究所の様々な事業にご協力をいただきます。

研究課題

可食きのこへの放射性核種の濃集挙動に関する研究

大貫 敏彦

東京工業大学 科学技術創成研究院 先導原子力研究所 教授



北海道大学工学研究科応用物理学科を修了後、日本原子力研究所(現在、日本原子力研究開発機構)に入所し、放射性廃棄物処分の安全性を評価する上で重要な、環境中における放射性核種の挙動を解明する研究を行ってきた。東京電力福島第一発電所の事故以後は、放射性セシウムの環境中挙動、特に糸状菌の子実体であるキノコへの濃集とその抑制手法の開発に取り組んでいる。森林内における放射性セシウムの移行経路としては、リター

層が樹木からの移行時の受け皿となり、その後の土壌層中の浸透、樹木による吸い上げが考えられる。この経路において、糸状菌は易動性の放射性セシウムを取り込むことが知られている。しかしながら、糸状菌の放射性セシウムの移行への影響は未だ解明されていない。そこで、本研究では、糸状菌及びその子実体であるきのこへの濃集挙動を明らかにする。具体的な研究内容は、森林リター層や樹木に降下した放射性Csからのきのこへの移行

を、原木栽培したきのこや天然のきのこの分析を行うことから調べる。さらに、大型放射光などの最先端分析装置による物理化学的特性評価からきのこに濃集したCsの化学状態を解明する。また、きのこへの移行を阻害する物質についても明らかにする。これらの結果を統合して、放射性セシウムの長期的な環境中移行予測評価の信頼性向上に貢献するとともに、食用きのこへの移行を抑制する方法を開発したいと考えている。

研究課題

「福祉教育学」「ソーシャルワーク論」

川 廷 宗 之

大妻女子大学 名誉教授



ある方から「あなたの専門は何か」と聞かれたことがある。本来は「ソーシャルワーク論」なのだが、自分なりの思いを込めて書いてきた著書などは「福祉教育実践研究」に関するものが多い。ソーシャルワーク関連も数はあるが教科書原稿が多く、論文というには恥かしい。それでも「ソーシャルワーク学」「福祉教育学」両方の学会の会長職もさせていただいたし、これからの研究も、この二つが中心となる。どちらも、未来の形成に関わる創造的な側面の研究が可能だと考えるからである。特に「教育」関連の研

究は、その対象が未来創造の主体となるわけだから、未来を考えない教育研究は成り立たないといっても過言ではなからう。勿論、ソーシャルワーク研究も本来は創造的な側面もあるのだが、当面する問題解決に追い回されて、非常にミクロな部分にこだわる研究も多く(この点は、福祉教育学にも言えるが)、マクロな視点を欠いているものが多いため、余り面白くない。

かつて若き日に「日出る所の経済、日昇る所の政治、日沈む所の学問」とヘーゲルは言ったと聞いた覚えがある。学問とは真理を追及する

ことにより未来を展望する基礎となることで社会に貢献するものだと思っていた私には、「学問なんか」と誹謗するように紹介されたこの言葉は重いものがあった。実際に研究論文を読んでみても、確実性を求める為か、仮説もなく現在の現象の整理でしかないものも少なくない。あまりしがらみを気にしなくてよい立場になった今、同じ研究をするのであれば、後世の人たちに批判されてもよいので、未来を展望することで社会的貢献ができるような内容に取り組みたいと考えている。

研究課題

言語統計解析に基づく計算モデルを用いた日本語と中国語の比較研究

中川 正 宣

東京工業大学 名誉教授



【経歴】

1974年に東京大学文学部を卒業し、1976年同大学大学院人文科学研究科修士課程を修了、1980年に同大学院人文科学研究科博士課程単位修得後退学した。

また1988年には東京大学から博士(文学)の学位を取得し、1989年に北海道大学文学部助教授に就任した。その後1996年から2016年まで東京工業大学大学院教授を務め現在、東京工業大学名誉教授である。

【研究課題】

現在、比喩理解・比喩生成、帰納的推論を中心に言語統計解析

を用いた計算モデルと心理実験に基づき、日本語および中国語の意味構造および意味理解過程の心理学的比較研究を行っている。これまでの研究では、まず、日本語および中国語各々の大規模言語データの統計解析に基づき日本語、及び中国語の確率的概念構造を構成した。次に、構成された日本語および中国語の確率的概念構造各々の妥当性を各々の母国語話者を対象とした心理学実験に基づき検証した。さらに、心理学的妥当性が検証された確率的概念構造に基づき各々の言語を用いた比喩理解・比喩生成、及び帰納的推論の計算モデルを構成し、各々のシ

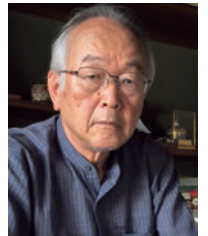
ミュレーション結果と各々の母国語話者を対象とした心理学実験の結果を比較し、各々の心理学的妥当性を検証した。現在は、このようにして構成された確率的概念構造や比喩理解・比喩生成及び帰納的推論の計算モデルのシミュレーション、さらに前記の各心理学実験の結果に基づき両言語の意味構造と意味理解過程の心理学的比較検討を行っている。

研究課題

「読む」という行為の変容に関する研究

前 納 弘 武

大妻女子大学 名誉教授



1944年生まれ。中央大学大学院文学研究科社会学専攻博士課程単位取得満期退学。専門は社会学、情報学基礎、人文社会情報学。本学院に社会情報学部が設置された92年から教授として着任。96～00年まで社会生活情報学専攻主任、00～04年まで大学院社会情報研究科社会生活情報専攻主任、06～10年まで社会情報学部長と大学院社会情報研究科長を兼務、10～14年まで大学院人間文化研究科現代社会研究専攻主任を歴任。学外では、96～00年、02～08年まで日本社会情報学会理事を、06～08年には同学会副会長を務めるなど、社会学および社会

情報学教育において重要な役割を果たしてきた。

ここ数年来の研究課題は、人々の文字を「読む」という行為の原初的考察からその変容にある。巷間、しばしば指摘されるように、今日の「読む」という行為は、活字文字よりもデジタル文字を「読む」方に力点がおかれている。その結果、「読む」主体にとっての内的影響や社会のあり方に対する影響はどのように異なるものであろうか。書かれた物を伝達する方式の歴史からみると、電子メディアのディスプレイで「読む」という行為をめぐるのは、紀元4世紀頃の巻物から冊子体への変革、中世の活字印刷術の発明

につづく、3度目の変革が起こりつつあるとも言われる。かつて冊子体への変革によってページが発明され、ページと索引によって検索が可能になった。検索に関する限り、電子メディアは無数の可能性をもつことになったが、それぞれの伝達方式に潜在する正と負の側面を見極めることは今後ますます重要な事柄となるであろう。

研究課題

ミャンマー連邦共和国における臨時教員の大量投入が
教育条件と質の改善に及ぼした効果に関する分析研究

牟田 博 光

ミャンマー連邦共和国教育省政策顧問
国際開発センター 主席研究員日本評価学会顧問
前東京工業大学理事・副学長

前任校の東京工業大学では、定年前は研究科長、副学長など管理職の仕事に忙殺され、自由になったら好きな研究をしたいと思っていた。幸い、JICAの仕事で、ミャンマー連邦共和国教育省で政策顧問を始め、自主的に出来る事はないかと考え、教育統計の分析をして論文を書き、政策提言を盛り込み、エビデンスに基づいた教育政策のアドバイスをする事にした。現在まで3名の教育大臣にお仕えし、11本の研究成果を出し、高く評価いただいている。

ミャンマーでは教育に関し、未公開だが実務用に多くのデータが

収集されている。依頼すればほとんどのデータは入手可能であり、分析結果の公表もできる。省内で分析結果の説明などを行い、職員的能力向上活動にも利用している。今回特別研究員に採用いただいたので、これまでの分析結果をまとめ、必要な考察を付け加えて、アカデミックな論文の形で発表したいと考えている。

教員養成は教員養成校で主に行われ、その供給が限られている。急速な教員需要を満たすため、2013、14年度に、約74千人もの大卒だが教職免許のない臨時教員を労働市場から採用し小学校に配

置した。2016年度から3年間でさらに105千人の採用計画がある。この臨時教員は1年間の勤務の後、研修を受けて次年度正規雇用となる。2013年3月における政府の基礎教育学校教員総数は280千名、そのうち小学校は185千名なので、その大きさがわかる。教員一人当たり児童生徒数は小さくなるが、質の面で不安がある。この臨時教員大量投入はある意味巨大な実験であり、そのインパクトを細かく分析する事は、今後の教育政策に有効な示唆をもたらすと考えられる。

人間生活文化研究所 研究費助成事業

人間生活文化研究所では、大妻女子大学の教職員、大学院生、研究員を対象に、さまざまな研究費助成制度を設けています。

■ 共同研究プロジェクト

学内における研究者間交流の促進、新たな研究課題の発掘、競争的外部資金への応募促進を目的とする助成制度です。助成の対象は、本学の専任教職員を代表者とする共同研究。異分野の研究者で構成されるこのプロジェクトでは、平成20年度からこれまでに160以上の研究課題が遂行されてきました。

平成28年度 共同研究プロジェクト 採択課題（14件）

所 属	研究代表者	研究課題
家政学部	青江 誠一郎	マウスにおける消化管免疫と食物繊維の腸内発酵の関係に関する研究
家政学部	石井 雅幸	教科の学習における子どもが推論する場面の指導法の検討 ―子どもが推論する過程の検討を通して―
家政学部	上杉 幸世	学童期小児における運動器発達と食事・生活状況の関連
家政学部	大網 美代子	機能美に特化した身障者と健常者が共有できる服の開発研究
博物館	高垣 佐和子	大妻精神の継承と具現 ―聞き取り調査を通じ大妻の教え・学びを探る1―
家政学部	小林 実夏	食文化や食環境が味覚感受性・嗜好性に及ぼす影響
家政学部	田中 直子	ミトコンドリアが誘導する脂肪細胞の炎症性変化：脂肪滴とのクロストークを見る！
家政学部	中川 麻子	女性が選好するアメニティ空間と家具に関する研究(3)
国際センター	服部 孝彦	アカデミック・コミュニケーション能力育成を目指す英語教育の研究
人間関係学部	福島 哲夫	生理指標と自己評定及び事後インタビューを用いた心理療法の即時的効果と持続的効果の測定
社会情報学部	細谷 夏実	「海育(海行く)」の取り組み：子どものための磯の生きものガイドブック制作
家政学部	堀場 愛弓	女子大学生が快適に過ごせるキャンパスデザインの研究
人間関係学部	町田 章一	女性の職業選択と大学進学動機に関する実証的研究(3)
文学部	松村 茂樹	アジア太平洋地域における諸問題解決に向けての総合的研究

■ 大学院生研究助成(A)(B)

本学大学院の教育・研究を高度化、活性化することを目的とする助成制度です。助成(A)は大学院博士後期課程在籍者、助成(B)は修士課程在籍者が対象。この制度は、本研究所の協賛企業からの賛助金により運営されています。平成28年度より、奨学金のように採択額が一括で支給されるようになりました。

平成28年度 大学院生研究助成(A) 採択課題 (8件)

所 属	申請者	研究課題
言語文化学専攻	飯田 さやか	古今和歌集注釈書における竹取説話
人間生活科学専攻	工藤 陽香	マウスの肝臓における脂質代謝関連酵素活性に及ぼすホエイペプチドの影響
人間生活科学専攻	佐藤 祐子	病院管理栄養士の栄養相談スキルの評価方法の確立
言語文化学専攻	鹿野 美由紀	王朝文学に見る裳唐衣装束について
言語文化学専攻	杉山 眞弓	19世紀後半のアメリカの女性文学にみる女性の仕事観 ―自己実現のための仕事と家庭
人間生活科学専攻	福島 あずさ	玄米食者の腸内細菌叢の特性に関する予備的研究
人間生活科学専攻	山中 千恵美	ミセル性リン酸カルシウムがマウスの耐糖能改善に及ぼす影響
言語文化学専攻	渡邊 万里子	文脈を伴うフォーカス・オン・フォームの指導効果

平成28年度 大学院生研究助成(B) 採択課題 (34件)

所 属	申請者	研究課題
現代社会研究専攻	朝倉 由衣	ソーシャルワーク・スーパービジョンの発展過程とわが国の現状と課題
人間生活科学専攻	磯田 有香	小児専門病院におけるNST活動活性化プログラムがスタッフの行動変容に与える影響
人間生活科学専攻	伊藤 陽子	高齢者の低栄養予防のための知識と健康観に関する研究
人間生活科学専攻	尹 曉楠	日本型食生活が中国人留学生の食習慣・健康習慣に与える影響
人間生活科学専攻	植田 桜	着用実験による浴衣地の地直し処理効果の検討
臨床心理学専攻	薄井 瑛理香	日本人の対人不安発生プロセスの検討 ―文化的自己観の影響―
臨床心理学専攻	霞 麻紗子	過剰適応の規定要因とその生起過程の検討
人間生活科学専攻	加藤 花苗	裁縫教科書に見られる裁ち方の変遷 ―明治初期から現在―
臨床心理学専攻	神沢 美波	妊娠期の女性の心理的变化についての理解 ―半構造化面接と母子画を通して―
人間生活科学専攻	川久保 愛美	小胞体ストレスがインスリン分泌に与える影響:小胞体カルシウムを観る
現代社会研究専攻	木村 恵理	ライフストーリーとアイデンティティ ―家族関係からみる自己形成
臨床心理学専攻	黒川 こころ	心理臨床家訓練生のスーパーヴィジョン体験について
臨床心理学専攻	齋藤 日向子	摂食障害傾向とアサーション行動との関連について
臨床心理学専攻	酒居 美津代	ストレスフルな体験の意味づけの過程と情緒への気づきについて ―臨床1事例の質的検討―
臨床心理学専攻	坂巻 詩織	家族認知と食行動異常との関連
人間生活科学専攻	阪本 秀典	教科横断的にはたらく能力の実践的研究
臨床心理学専攻	嶋山 ちひろ	正常解離に関する研究 ―最早期記憶とTATとの比較から―
人間生活科学専攻	重枝 彩	保育実習において、学生が学ぶために、保育者はどのような働きかけをしているのか ～実習生の変容を通して～
言語文化学専攻	芝 すみれ	第二言語習得に伴うアイデンティティの変化をみるパイロットテスト
人間生活科学専攻	鈴木 優理子	LC-MS/MSを用いた食品中に含まれるD-アミノ酸の分析
言語文化学専攻	角南 梨央	上海における高齢化問題について
人間生活科学専攻	関 容子	保育施設の選択要因となる情報入手法
臨床心理学専攻	高坂 紗也乃	“思い出し羞恥”の特質と変化の検討
臨床心理学専攻	竹下 亜美	セラピストの共感疲労についての研究 ―スーパービジョンの効果を中心に―
現代社会研究専攻	栃木 美芽	差別者とは誰か「自己性」と「他者性」という観点から
人間生活科学専攻	中澤 沙希	若年女性における低骨格筋量とその背景因子の分析
現代社会研究専攻	仁科 薫	子育て中の母親の困難とそれに対応する子育て支援政策の可能性
言語文化学専攻	NINH THI NHAN VAN	日本語の自称詞・対称詞の研究
現代社会研究専攻	原島 伶奈	世代間で継承される自己決定についての言説 ～母娘、伝えられること伝えられないこと～
臨床心理学専攻	原田 奏江	青年期女性のキレについて ―自己愛傾向と自尊感情の観点から―
言語文化学専攻	福田 美蘭	平安時代の「かげ」の意味と用法 ―三代集を中心に―
言語文化学専攻	宗近 水穂	東アジアにおける漢字の使用と文化的アイデンティティ ―漢字復活の意味を問う―
言語文化学専攻	村上 奈帆	黄表紙の中の神仏
言語文化学専攻	山崎 萌子	平安貴族女性の裳唐衣衣装

■ **研究員研究助成**

本研究所研究員の競争的外部資金への応募を促進することを目的とした助成制度です。この制度は、平成26年度より競争的研究資金として再出発しました。

平成28年度 研究員研究助成 採択課題（2件）

申請者	研究課題
戸田 里和	インターネット利用行動が食習慣に与える影響
中西 純	ネパールにおけるベジタリアンの子どもの発育発達に関する研究

大妻女子大学 戦略的個人研究費

大妻女子大学教員の研究活動の活性化・高度化、競争的外部資金への応募促進を目的とした助成制度です。助成の対象は、本学の専任教員による個人研究。平成26年に新設され、人間生活文化研究所は本学総務グループと協働して管理・運営に当たっています。

平成28年度 戦略的個人研究費 採択課題（37件）

所 属	申請者	研究課題
家政学部	青江 誠一郎	定量的PCR法による腸内細菌叢の解析法の確立とマウスを用いたMACs(Microbiota-accessible carbohydrates)の評価
家政学部	阿部 和子	乳児期における「望ましい未来を作り出す力の基礎を培う」保育所保育の検討Ⅱ ―発達経験を中心に―
社会情報学部	生田 茂	合理的配慮指針に基づく教材と授業手法の開発 ―海外の研究者との共同の取り組み―
国際センター	伊藤 みちる	クレオール化のダイナミズムと白人性の多様性 ―バルバドスとトリニダードの比較研究
人間関係学部	井上 修一	意思確認が困難な特別養護老人ホーム入居者のストレス把握と除去に関する研究
文学部	榎本 恵子	17世紀フランス王太子の教育にみる古典ラテン喜劇作家の位置づけと重要性の検証
家政学部	加藤 悦雄	コミュニティ・エンパワーメントを推進する子どもNPOの機能に関する基礎的研究
短期大学部	鎌田 久子	母親の食事づくり行動が子どもの食事づくりの認知に及ぼす影響の検討
比較文化学部	城殿 智行	近代における超越と表象の相関を主題とする比較文化研究の基盤整備
文学部	熊谷 智博	集団間和解に対する安心感の影響の社会心理学的研究
社会情報学部	黒瀬 奈緒子	絶滅が危惧される小型食肉目の孤立個体群化の程度の把握と持続可能な保護管理法の確立Ⅱ
文学部	小井土 守敏	流布本『保元物語』『平治物語』の物語構造
文学部	五味 典嗣	福島県浜通り地域における複合災害の記憶と表象 ―文学研究の立場から
文学部	里見 脩	台湾総督府における言論統制の検証 ―台湾日日新報を通して―
文学部	鈴木 紀子	パール・バックとアメリカ対日冷戦文化外交との関係性 ―『大津波』を中心に―
家政学部	高波 嘉一	低骨格筋量の若年女性に対する乳酸発酵蛋白たんぱく質飲料摂取の効果
家政学部	高橋 ゆう子	わらべうた遊びを通じた共同調整の分析:定型発達児と自閉症スペクトラム児の比較検討
短期大学部	竹内 知子	細胞質局在化RNAの局在化機構の解析
比較文化学部	武田 千夏	スタール夫人のユニークな自由主義思想とその政治的影響について ―女性の近代西欧政治思想へのアプローチの一例として―
文学部	田中 東子	第三波フェミニズム的な主体による自己ブランド化に関する批判的分析
家政学部	田中 直子	小胞体ストレスはインスリン分泌機構の老化を誘導するか?:リアルタイムイメージング技術を用いた研究
人間関係学部	田中 優	ボーイスカウトにおける教育効果に関する研究
人間関係学部	丹野 真紀子	介護支援専門員に対するグループ・スーパービジョンの質に関する研究
短期大学部	手呂内 伸之	根粒形成におけるサイトカイン関連遺伝子の組織特異的な発現の解析
文学部	古川 敏明	ハワイ語新聞の言説分析
人間関係学部	千川 剛史	地域連携デジタル・ネットワーキングに関する研究
家政学部	堀江 正一	食品添加物として用いられているポストハーベスト農薬の安全性確保に関する研究
社会情報学部	本郷 健	「情報的な見方・考え方」を育成するための「逆向き設計」理論に基づくカリキュラムの開発と評価に関する研究
文学部	松村 茂樹	ボストン美術館における岡倉天心と長尾雨山および呉昌碩の貢献について
文学部	森岡 修一	ロシアにおける文化的多様化と教育改革 ―補充教育および教師教育を中心に―

▶ **学長要望課題**「大学教育の改善に関する研究」

家政学部	市川 博	インターネットリスクを減少させる情報リテラシー教育
家政学部	大網 美代子	持続的デザインシステムを用いた高齢者衣服と手工芸によるストレスコントロールの検討
家政学部	小林 実夏	栄養士養成施設卒業後の生活習慣・食生活・健康度に関する縦断研究
短期大学部	高橋 ユリア	優しい心とフードコーディネイト教育
短期大学部	土肥 麻佐子	学修効果の可視化を特徴とするアクティブラーニング型授業の方法論の検討
国際センター	服部 孝彦	中高大を連携したアカデミック・イングリッシュ力育成のための指導法と教材の開発に関する研究
人間関係学部	本田 周二	アクティブラーニングとしてのインターンシップの教育効果に関する研究

本学における科学研究費助成事業採択状況**日本学術振興会 科学研究費助成事業 平成28年度採択課題****▶ 新 規**

種 目	研究代表者	所 属	研究課題	研究期間
基盤研究(C)	青江 誠一郎	家政学部	穀類の摂取による高血圧症の予防効果と腸内代謝を介したメカニズムの研究	H28～H31
基盤研究(C)	天野 みどり	文学部	現代日本語の自他に関する構文的研究	H28～H31
基盤研究(C)	生田 茂	社会情報学部	学校の教員と取り組む合理的配慮指針に基づく教材開発と授業手法の開発	H28～H30
基盤研究(C)	石井 雅幸	家政学部	星座カメラi-CANを活用した、日本中の小学校で星の学習ができる教材の開発	H28～H30
基盤研究(C)	上野 未央	比較文化学部	中世後期ロンドンの「外国人」と都市社会	H28～H30
基盤研究(C)	小関 右介	家政学部	伝統的農法「稲田養魚」の高い米魚生産性を支える生態系プロセスの科学的検証	H28～H30
基盤研究(C)	須藤 良子	家政学部	エジプト・コプトの染織品とインド更紗の制作年代および制作地の特定に関する研究	H28～H30
基盤研究(C)	中川 麻子	家政学部	手芸文化データベースの構築と教育現場への活用	H28～H30
挑戦的萌芽研究	吉原 直樹	社会情報学部	ポスト3・11と原発事故被災者の「難民」化の実相	H28～H29
若手研究(B)	宮崎 美智子	社会情報学部	視線随伴パラダイムを用いたAgency調整システムの発達過程の解明	H28～H30
若手研究(B)	山本 真知子	人間関係学部	里親養育における里親と実子の意識とその支援のあり方	H28～H31
特別研究員奨励費	小川 真理子	社会情報学部	DV被害者支援と民間シェルターにおける米・加・日の比較研究	H28～H30
研究成果公開促進費 (学術図書)	江頭 浩樹	比較文化学部	On Extraction from Subjects: An Excorporation Account	H28

▶ 継 続

種 目	研究代表者	所 属	研究課題	研究期間
基盤研究(A)	大澤 清二	人間生活文化研究所	人が生育する限界的環境に於ける発育発達(生活技術の発達を含む)と成熟の総合的研究	H27～H30
基盤研究(B)	柴山 真琴	家政学部	日系国際児のバイリテラシー形成過程の質的探究とその展開	H26～H30
基盤研究(B)	下田 敦子	人間生活文化研究所	東南アジア伝統衣服製作技術体系の解明と伝承教育最適化のためのプログラム開発	H26～H29
基盤研究(B)	水谷 千代美	家政学部	消臭抗菌抗アレルギー繊維の機能性評価と介護医療分野への応用	H26～H29
基盤研究(B)	吉原 直樹	社会情報学部	海外日本人社会における移民主体の変容とコミュニティの再形成に関する経験的研究	H25～H28
基盤研究(C)	荒川 潔	社会情報学部	移行期における次世代自動車の開発と普及のための税制と規格、規制の理論・実証分析	H27～H29
基盤研究(C)	伊藤 正直	社会情報学部	1960年代のG10とOECD/WP3	H27～H29
基盤研究(C)	落合 友四郎	社会情報学部	金融市場の高頻度データ解析とリスク管理への応用	H27～H31
基盤研究(C)	佐藤 実	比較文化学部	近世中国におけるムスリムの問答体文獻の研究	H27～H29
基盤研究(C)	團野 哲也	家政学部	ユーザーにフレンドリーな高精度3次元ファッション・デザインシステムの開発	H27～H29
基盤研究(C)	土肥 麻佐子	短期大学部	「量産衣料のデジタル仮縫い工房」開発のためのベーシックパターンモデルの検討	H27～H29
基盤研究(C)	内藤 千珠子	文学部	日本語文学における検閲とジェンダー	H27～H31
基盤研究(C)	正村 俊之	社会情報学部	ガバナンスのリスク社会論・監査社会論的研究 ― 資本主義と民主主義の現代的変容	H27～H29
基盤研究(C)	山倉 健嗣	社会情報学部	制度環境における企業の戦略的対応と組織間関係構築に関する研究	H27～H29
基盤研究(C)	渡邊 顕彦	比較文化学部	ラテン語詩と近世初期日本の交差	H27～H29
基盤研究(C)	小川 真理子	社会情報学部	災害時におけるDV被害者支援と民間シェルターの役割	H26～H28
基盤研究(C)	木戸 雄一	文学部	地方青年結社における「文」の実践に関する社会史研究	H26～H28
基盤研究(C)	熊谷 智博	文学部	集团的尊敬による集団間紛争解決過程の解明	H26～H28
基盤研究(C)	高田 馨里	比較文化学部	第二次世界大戦期、米英両国の世界地理認識の比較研究 ― 地図史研究の方法論を用いて―	H26～H28
基盤研究(C)	鄭 映恵	人間関係学部	「表現の自由」とヘイト・スピーチ法規制をめぐる社会学的研究	H26～H28
基盤研究(C)	福島 哲夫	人間関係学部	初心者および中級者への継続的スーパーヴィジョンの効果とプロセスに関する実証的研究	H26～H28
基盤研究(C)	藤村 考	社会情報学部	属性付きグラフのレスポンス可視化の研究	H26～H28
基盤研究(C)	上杉 幸世	家政学部	中高年女性の健康力と若年期の食生活・生活習慣に関する縦断研究	H25～H29
基盤研究(C)	小林 実夏	家政学部	栄養士養成施設卒業生、在校生の健康リスクとBMI、体脂肪率に関する横断・縦断研究	H25～H28
基盤研究(C)	高木 元	文学部	近世近代の枠を越えた十九世紀絵入小説を記述するための書誌学的研究	H25～H28
挑戦的萌芽研究	五味淵 典嗣	文学部	日中戦争の記憶と表象に関する総合的研究 ― 1940-1960年代を中心に	H27～H29
挑戦的萌芽研究	高橋 寿美子	人間生活文化研究所	作家の計量分類による日本近現代文学史の構築	H27～H29
挑戦的萌芽研究	寺石 雅英	キャリア教育センター	リアルオプション・アプローチを用いたプロスポーツチームの価値評価手法の開発	H27～H29
挑戦的萌芽研究	水谷 千代美	家政学部	寝たきり高齢者のQOL改善のための機能性繊維の応用に関する研究	H27～H29
挑戦的萌芽研究	城殿 智行	比較文化学部	欧米並びにアジアとの比較を介した日本近代文学及び映画における死の表象の再構築	H26～H28
若手研究(B)	赤松 美和子	比較文化学部	台湾ニューシネマとそれ以降の台湾映画における「日本時代」表象研究	H27～H30
若手研究(B)	久保 忠行	比較文化学部	民族誌的アプローチにもとづく難民の定住プロセスの国際比較研究	H27～H29
若手研究(B)	松本 早野香	社会情報学部	「語り」の蓄積からコミュニティの物語を出力する地域デジタルアーカイブの構築と運用	H27～H29
若手研究(B)	牧野 智和	人間関係学部	少年犯罪の社会問題化とその収束に関する社会学的研究	H26～H28
若手研究(B)	古川 敏明	文学部	ハワイ語ラジオ番組の相互行為分析	H25～H28

お知らせ

■ 本研究所「大学院生研究助成」が変わりました

本研究所協賛企業からの支援により運営される「大学院生研究助成」の助成金給付方法が変更され、今年度からは、奨学金のように採択額が一括で採択者に支給されるようになりました。

■ 本学の科研費新規採択件数「家政・生活学一般」で全国1位!!

過去3年(平成25年～27年度)の科学研究費補助金細目別新規採択累計数で、本学は細目「家政・生活学一般」において全国1位となりました。また、平成27年度の本学の配分額は、新規・継続分合わせて70,850千円、私立大学で95位*でした。※『教育学術新聞』平成27年10月7日

■ 人間生活文化研究所が行うミャンマー国立図書館への図書の寄贈事業
－ 平成28年度の初回は、本研究所と本学図書館の協力活動の一環として実施されました －

本事業はミャンマーへの運搬料が難題となっております。そこで本学図書館から私立大学図書館協会の寄贈資料運搬事業に応募申請しておりましたところ、この度受理されました。今回は500冊の英文の専門図書を国立図書館へ送りました。ミャンマーは専門図書が極めて乏しく、新首都ネピドーに設立された壮大な図書館にも配架する図書が不足しています。これからも人間生活文化研究所としては支援を続ける予定です。

人間生活文化研究所 研究費助成事業関連 カレンダー

平成28年

	戦略的個人研究費	共同研究プロジェクト	研究員研究助成	大学院生研究助成(A)(B)
7月		7.12 H28 夏季休業前の予算執行伝票等の研究所受付締切(17時迄)		
8月		8.4 夏季休業開始		
9月		9.13 夏季休業終了		
		9.14 H28 予算執行伝票等の研究所受付再開		
10月		10.5 H27 研究成果報告締切(ジャーナルへの「短報」「原著論文」投稿)	10.13 H27 研究成果報告締切(ジャーナルへの「短報」「原著論文」投稿)	
11月			11.11 H28 図書の予算執行伝票の研究所受付締切	
	11.17 H28 「中間報告書」提出締切			
12月		12.11 H28 冬季休業前の予算執行伝票等の研究所受付締切(17時迄。 なお、「設備備品」予算執行伝票の研究所受付は最終締切となります。)		
		12.23 冬季休業開始		

※ このカレンダーについてのお問い合わせ先は、☎03-5275-6047(千代田キャンパス内線5650)です。



大妻女子大学人間生活文化研究所

〒102-8357 東京都千代田区三番町12番地
大妻女子大学千代田キャンパス図書館棟6階

Tel: 03-5275-6047 Fax: 03-3222-1928 E-mail: info@o-ihcs.com

HP: <http://www.ihcs.otsuma.ac.jp/>



▶ ニュースレターの最新号およびバックナンバーはホームページよりご覧いただけます。